

『更級日記』小考

——「あさみどり」の歌と源資通——

西山秀人

『更級日記』は、少女時代より晩年までの約四十年に及ぶ菅原孝標女の生涯を綴つた作品である。その内容は(一)上洛の記、(二)家居の記、(三)宮仕えの記、(四)物語詣での記、(五)晩年の記の五部におおむね分類され、物語への憧憬と神仏への信仰という二極対立の視座から人生を顧みようとする姿勢が全編にわたつて看取される。このうち、(三)宮仕えの記は、長暦三年(一〇三九)作者三二歳の頃、後朱雀天皇皇女祐子内親王への初出仕の模様を記した四九段⁽¹⁾に始まり、長久三年(一〇四二)―寛徳元年(一〇四四)における源資通との邂逅を縷々語つた六〇段に至るまでの一連の記事を指すが、中でも六〇段についてはとりわけ多くの紙幅を割き、『源氏物語』に範を仰ぎ⁽²⁾つ、理想的な王朝美の世界を現出している。

作者と資通との出会いは十月朔日、「ほしのひかりだに見えずくらきに」時雨そほ降る夜、高倉殿で催された不断経の折であつた。「おとなしくしづやかなるけはひにて物などい」う人で、作者も「くちおしからざなり」と好印象を持つ。しかも、「世のつねのうちつけのけさうびてなどもいひなさず、世中のあはれなることゝもなど」を語るの、さすがに黙りこくつてもいられず、朋輩女房とともに応対していると、やがて話題は春秋の定めに及んでゆく。秋に心を寄せる朋輩に対して、作者は春をよしとして、「あ

さ緑花もひとつにかすみつ、おぼろに見ゆる春の夜の月」と詠じたところ、資通はこの歌を「返、うちずんじて」、「こよひより後のいのちのものもしもあらばさは春の夜をかたみとおもはむ」と返歌、さらに斎宮の雪の夜の思い出と冬の月の興趣について語り、今宵は「斎宮の雪の夜におとるべき心ちもせずなむ」といふ一言を残して去っていく。

その後の邂逅譚については省略に従うが、資通が上掲「あさみどり」の一首を返す返す吟詠したのは、本当に「此の歌を感賞した」⁽³⁾からなのだろうか。確かに、当該歌は、詠作事情をやや異にしながらも『新古今集』に採られ、⁽⁴⁾それゆえか「作者の歌の中で、もつとも美しい、すぐれたもの」⁽⁵⁾「幽艶なすぐれた歌」という評価が与えられてきた。しかしながら、同時代的な視点から当該歌の詠風を捉えてみると、「異質ではないが当代一般の慣用的情趣である」とは言いがた⁽⁷⁾いようであり、『新古今集』への入集をもつて当該歌を日記随一の秀歌と位置付けることはいささか問題があらう。今なお解釈に揺れがみられ、⁽⁸⁾決して明解とはいえない当該歌をなぜ資通が繰り返し吟詠したのか、その点についていささかの卑見を述べてみたい。

言うまでもなく、「あさみどり」の歌は次に挙げる資通の春秋優劣論を踏まえた上で詠まれている。

春秋の事などいひて、「時にしたがひ見ることに、春が^Aすみおもしろく、そらものどかにかすみ、月のおもてもいとあかうもあらず、とをうながる、やうに見えたるに、琵琶のふかうでうゆる、かに

ひきならしたる、いとみじくきこゆるに、又秋になりて、月いみじうあかきに、そらはきりわたりたれど、手にとるばかりさやかにすみわたりたるに、かぜのをと、むしのこゑ、とりあつめたる心地するに、箏のことかきならされたる、ぬやう定のふきすまさされたるは、なぞの春とおぼゆかし。又、さかとおもへば、冬の夜の、そらさへさえわたりいみじきに、ゆきのふりつもり、ひかりあひたるに、ひちりきのわな、きいでたるは、春秋もみなわすれぬかし」といひつゞけて、「いづれにか御心とゞまる」と、ふに、秋の夜に心をよせてこたへ給を、「さのみおなじさまにはいはいはじ」とて、

あさ緑花もひとつにかすみつゝおぼろに見ゆる春の夜の月

とこたへたれば、返、うちずんじて、「さは、秋のよはおぼしすてつるな、りな。

こよひより後のいのちのもしもあらばさは春の夜のかたみとおもはむ」

といふに、秋に心よせたる人、

人はみな春に心をよせつめり我のみや見む秋のよの月

(二六〇段)

傍線部Aで語られた霞にけぶる朧月夜のイメージに「花」を添えて一首に仕立てている。その表現形成に際しては、佐藤和喜氏⁽⁹⁾が指摘された、

不明不暗朧朧月

①てりもせずくもりもはてぬ春の夜のおぼろ月夜にしく物ぞなき(千里集・72)

九月十五日宮の御念仏はじめられる夜、あそびなどせられて、月のおぼろなるにふるき事など

おもふ心を人々読みけるに

②古へをこふる涙にくらされておぼろにみゆる秋のよの月（公任集・484）

春の夜の月

③くもりなきそらもかすみにかすみつつひかりにあかぬはるの夜の月（頼実集・7）

などの先蹤詠に依拠した可能性も少なくないが、加えて、

④いづれをかえだともわかむあをやぎのはなもひとつにあさみどりなる（近江御息所歌合・柳・2）

二月庚申に、女房どもおきゐてあかすにいひやる

⑤はなならばをりあかしてもありなましおぼろに見ゆるはるのよの月（高遠集・102）

の存在にも留意すべきであろう。「あさみどり」は平安和歌では上掲④を筆頭に新芽の形容として詠まれることが多いが、ここでは、

⑥あさみどりかひある春にあひぬればかすみならねどたちのぼりけり（大和物語・146段）

⑦あさみどりはるたつそらにうぐひすのはつこゑまたぬひとはあらじな⁽¹⁰⁾

（和漢朗詠集・上・鶯・73、麗景殿女御）

などと同様、春霞の色を形容したものとみておきたい。ただし、

⑧あさみどりはなのにしきををはるがすみいくらとしりていそぎたつらむ（尊経閣文庫本元輔集・136）

のような例ならともかく、当該歌の場合は春の草木とは関わりなく「あさ緑花もひとつに…」と続けており、それが一首の解釈を揺るがせている要因となっている。ちなみに、資通の歌作には夏の月を詠じた、

⑨なにをかはあくるしるしと思ふべきひるにかはらぬ夏の夜のつき（後拾遺集・夏・223）

を見るが、その詠風はいたって平明で、風流人の彼をもつてしても当該歌の主意を即座につかみ得たかどうかは疑問である。むしろ、資通が当該歌を「返、うちずんじ」たのは、鼎立する月の美に言及した自身のことを承けて、種々の既成表現を効果的に撰取することとつさの応答をものした作者の機転に感服したためではなからうか。あるいは歌意が理解しがたいために何度も吟詠したという見方も可能だが、当該歌を承けて即「…さは春の夜をかたみとおもはむ」という返歌を詠んでいることからすると、当該歌の出来ばえに不満を覚えたわけではないだろう。傍線部Dの「いづれにか御心とゞまる」という彼の問いかけは、おそらく初めから孝標女に標的をしばったものであり、彼女の文学的才覚を見ようとした一種の「試問」ではなかったかとも思われる。それに対して孝標女は当意即妙の和歌をもつて応答したので、資通は合格の意を込めた返歌を与えた。そのように考えれば、資通の返歌が当該歌の表現を全く無視した、会話体の詠みぶりを呈していることにも納得がいく。

右のように推察する理由をもう一つ挙げたい。前引の資通の優劣論を和歌的見地から分析してみると、実は『源氏物語』からの影響のみならず後掲惠慶法師詠との関連も窺われ、作者はその引歌に呼応する形で当該歌を詠じた可能性が浮上してくるのである。まず、傍線部Bで、秋の月光の澄み切った明るさを「手にとるばかり」と形容しているが、これはおそらく『源氏物語』の、

⑩めぐり来て手にとるばかりさやけきや淡路の島のあはと見し月（松風）
に依拠した表現ではなからうか。ちなみに『源註拾遺』『源注余滴』⁽¹⁾は証歌として、

東山にて、月あかき夜

⑪久方は手にとるばかりなりにけりくものゐるてふてらにやどりて（惠慶集・82）

の惠慶詠を挙げるが、ここでは⑩からの影響を想定するにとどめてよさそうである。しかしながら、冬の夜の情趣を語った傍線部Cについては、すでに指摘のある『源氏物語』朝顔卷の「冬の夜の澄める月に雪の光りあひたる空こそ」云々の叙述に加えて、

冬のよの月

⑫あまのはらそらさへさえやまさるらむこほりと見ゆる冬のよの月（惠慶集・116）

の一首も念頭に置かれているものと考ええる。この推察に立てば、作者は「そらさへさえわたり」の引歌を即座に惠慶詠と看破し、それに呼応すべく当該歌の詠出に際して「……見ゆるゝの夜の月」というフレーズを意図的に用いたという見方も可能となろう。ちなみに、⑫は『古今六帖』のほか『拾遺抄』『拾遺集』にも採られ、また日記中には同じく惠慶詠の、

河原院のいづみのもとにすずみ侍りて

⑬松影のいはるの水をむすびあげて夏なきとしと思ひけるかな（拾遺集・夏・131）
を踏まえたと思しい、

おく山のいしまの水をむすびあげてあかぬものとはいまのみやしる

（三一段、「四月つごもりがた、さるべきゆへありて、東山なる所へうつろふ。…」）

も見出し得る。作者が傍線部Cの発言から⑫の惠慶詠の一節を想起したとしても何ら不思議はなからう。

もちろん、上述したように当該歌が種々の既成表現に寄りすがって詠まれていることは自明だが、引歌となった惠慶詠と対応性を持たせ、しかも傍線部で語られた春の朧月の情趣をも表現するためには、それなりの工夫がめぐらされたものと思われる。資通は、そうした作者の機転と細やかな配慮に感じ入り、当該歌を返す返す吟詠したのではなからうか。

ところで、資通に対するこうした作者の心配りは、その翌年八月、宮中での再会時に詠まれた、

なにさまで思いでけむなをざりのこのはにかけし、ぐればかりを（六〇段）

の一首においても窺いみることができ。右歌は「時雨の夜こそ、かた時わすれずこひしく侍れ」という資通のことばを承けて詠まれたものだが、その表現形成に際してはおそらく馬内侍の、

十月ばかり、おもへることよみてと宮よりおほせられしかば

⑭ ねざめしてたれか聞くらむ此比の木の葉にかかるよはのしぐれを（馬内侍集・143）

に依拠したとみてほぼ間違いないであろう。⑭は『千載集』『後葉集』『統詞花集』等の撰集類に採られ、中世以降は馬内侍の代表歌の一つとして数えられるが、孝標女の時代においても、

⑮ このごろのこのはを見てもなぐさめよつねならぬよぞつねならぬこと（尊経閣文庫本定頼集・112）

⑯ 秋ふかみよはの時雨にねざめしてはるかにしかのこゑをきくかな（弁乳母集・60）

⑰ ね覚めして誰か又聞くさ夜千鳥おとなふ秋のふかきあはれを

(夫木抄・卷十三・秋雑・5542・宣旨、「裸子内親王家歌合、千鳥」)
など、⑭からの表現撰取を想定しうる歌作が散見される点、当時すでに人口に膾炙していたものと思しい。作者と資通との出会いは昨年の「十月ついたちごろ」、しかも「ほしのひかりだに見えずくらきに、うちしぐれつ、このはにかゝるをとおかしき」折であったことを鑑みると、孝標女は時雨の夜の想い出をより鮮明化させるための仕掛けとして、⑭の表現を自詠に織り込んだのではないだろうか。「ことながうこたふべきほど」ではないと慌ただしく詠まれた「なにさまで」の歌であるが、その表現をつぶさに見ていくと、先の「あさみどり」の歌と同様、作者の資通に対する配慮が感じ取れよう。なお、後に資通は朋輩女房を訪ねて返歌を託しようだが、その歌は伝わらない。

以上、本稿では『更級日記』における源資通との邂逅譚に焦点を当て、資通が「あさみどり」の歌を「返、うちずんじ」た理由について従来とは異なった視点から検討を施してきた。資通はどちらかといえば歌そのものよりも作者の当意即妙の応答ぶりに感服し、ゆえに当該歌を何度も吟詠したのではないか、というのが一応の結論だが、このように既成表現を巧みに撰取しつつ折にあった和歌を詠もうとする孝標女の歌作態度は、もっと正面から論じられてよいであろう。

紙幅の制約もあって触れ得なかったが、資通との邂逅譚自体、「作者の意識下の願望が生み出した一場の夢物語」¹⁴であった可能性をも考慮すれば、彼のような貴公子に自詠を感賞してもらうことが、すでに物語と決別したはずの作者をしてもなお止めやらぬ「あらまし事」であったのかもしれない。光源氏を地で

行くような情趣たっぷりの資通の語り口が、すべて作者によって一字一句練り上げられたフィクションであるとすれば、「あさみどり」以下の対資通詠もやはり「夢物語」の一コマとして新たに詠出されたものなのであろうか。他日を期して考えてみたい。

注

(1) 以下、『更級日記』の本文・章段数は橋本不美男・杉谷寿郎・小久保崇明氏『更級日記 翻刻・校注・影印』（昭54 笠間書院）に拠る。また、歌集本文の引用は『新編国歌大観』、散文本文の引用は『新編日本古典文学全集』に拠る。

(2) 中嶋朋恵氏「春秋優劣論と冬の月」（『東京成徳短期大学紀要』第17号 昭59・3）は、本段の春秋の定め場面が「源氏物語の、春秋優劣論から冬への展開という、新しく創造された鼎立した形と題材とを受け継いでいる」ことを指摘されている。

(3) 玉井幸助氏『更級日記新註』（昭24 目黒書店）。

(4) 『新古今集』の詞書は次のようである。「祐子内親王ふぢつぼにすみ侍りけるに、女房うへ人など、さるべきかぎりものがたりして、春秋のあはれいづれにか心ひくなどあらそひ侍りけるに、人々おほく秋に心をよせ侍りければ」（春上・56）。

(5) 佐伯梅友氏『更級日記の新しい解釈』（昭30 至文堂）。

(6) 関根慶子氏『講談社学術文庫 更級日記全訳注（下）』（昭52 講談社）。

- (7) 杉谷寿郎氏「更級日記―宮仕え記事を通して」(『国文学 解釈と鑑賞』昭和47年4月号)。
- (8) 小谷野純一氏『更級日記全評釈』(平8 風間書房)で整理されているように、初句「あさみどり」を空の色の形容とみるか、春霞の色の形容とみるかで諸注解釈が分かれる。後述。
- (9) 「更級日記歌の位相」(『国語と国文学』昭和60年4月号、『平安和歌文学表現論』平5有精堂所収)。
- (10) 初二句は「はるたつといふばかりにや三吉野の山もかすみてけさは見ゆらん」(拾遺集・春・1・忠岑)などにみる類型的発想に依拠しつつ、春の到来とともに空一面霞みわたった情景を詠じたものとみるべきであろう。単に空の青さを形容したものではありません。
- (11) 伊井春樹氏『源氏物語引歌索引』(昭52 笠間書院)に拠る。
- (12) 注2論文。
- (13) その他、『古来風躰抄』『時代不同歌合』『中古三十六人歌合』『新歌仙』『女房三十六人歌合』にも。なお、『後葉集』の詞書には「一条院御時、皇后宮、十月ばかりのよしづかにてしぐれしけるに、うたよめとおほせられければ、よみてたてまつりけるうた」(冬・402)とある。
- (14) 吉岡曠氏「ただ木ぞ三つ立てる」(『新日本古典文学大系 土佐日記 蜻蛉日記 紫式部日記 更級日記』平1 岩波書店所収)